本の万華鏡

『経済学とは何か』

根井雅弘著 ―― 中央公論新社 二〇〇八年

推薦者
清水 英範（しみず・ひでのり）
大阪ガス（株） エネルギー・文化研究所 主任研究員

本号では生活者意識調査をベースにして二〇二〇年に対する希望や理想が紹介され、また各論稿においては社会・生活・技術・環境問題などの動向が触れられており、最新のパースペクティブとなっている。したがって、二〇二〇年の展望を紐解く最大のヒントは本誌に求めることができる。

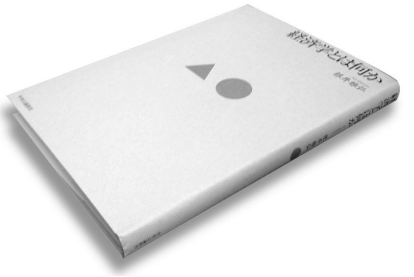
本誌とは違った視点で近未来の生活者像を考えるよすがとして、あえて屋上屋を架すならば、それは人間と社会に対する洞察力の涵養（かんよう）であろう。将来、合意と連帯により、各々の個人生活レベルの利害を超え、全体最適の生活を実現するために、そうした感性を練磨することは有益と思われる。

近代社会における進歩主義・技術主義への過剰な信仰が、今日の環境問題やカジノ資本主義的状況など、社会生活への脅威を招来した面もあることは否定できない。したがって、歴史の知恵に学ぶべき点も多々あろう。もちろん、哲学や文学作品に人間存在の意味、人生の指針、人間の苦悩などを探ることも可能である。一方、経済学は現象分析の道具として、人間や社会を究極的にモデル化して取り扱ってきたと一般的には理解されている。

「エコノミックス（経済学）」の語源は、古代ギリシャの著述家クセノポンの造語「オイコノミクス」に遡る。「オイコス」（私的統治の最小単位すなわち家）と「ノモス」（制度・法）の合成語であり、それゆえ「共同体のあり方」とも説明されるが、より正確には「オイコス」の代表者たる家長が「ポリス」（都市国家）のメンバーを構成し、私的共同体の成果（家政）を公的領域に制度化するという意味が含まれている。経済学には、個人の理想を現実世界で実現するための課題解明を目的として発展した総合的学問という側面も存在するのである。

例えば、近年の金融システム不安定状況下において、その「不確実性」概念が再評価された経済学者フランク・ナイトは、一般にはシカゴ学派の祖であるミルトン・フリードマンの指導教官というイメージが先行するが、彼には市場メカニズムの役割を認識しつつも、競争の限界と人間行動の独自性（社会性・文化性・歴史性）を強調し、リベラリズムの倫理を問い続けた道徳的経済学者という隠された素顔がある。こうした碩学（せきがく）の業績に触れることで、未来への指針のヒントは、既に人類の文化遺産にも隠されていることが理解できる。

本書は新書などの経済学解説書と比較すれば、やや専門的な用語や表現が用いられているが、経済学を思想史レベルで解説しており一読に値する。なおフランク・ナイトの著作の邦訳は現在絶版で、かつ原書も難渋な文体で書かれており、業績をうかがい知ることは困難だが、本書ではナイトの解説にも数ページが割かれており、その点でも推薦しておきたい。



from editor's room

- 『「終の住みか」のつくり方』高見澤たか子 晶文社（2004年）
- 『10年後の日本』『日本の論点』編集部 文春新書（2005年）
- 『サバが1口より高くなる日―危機に立つ世界の漁業資源』井田徹治 講談社（2005年）
- 『現代日本の社会意識―家族・子ども・ジェンダー』渡辺秀樹 慶應義塾大学出版会（2005年）
- 『持続可能な発展』淡路剛久、川本隆史、植田和弘、長谷川公一 有斐閣（2006年）
- 『少子化時代の政策形成』諸富徹 有斐閣（2006年）
- 『あなたの知らない妻がいる―熟年離婚にあわないために』狭間恵三子 講談社（2006年）
- 『ワークライフバランス社会へ―個人が主役の働き方』大沢真知子 岩波書店（2006年）
- 『サステイナブルな未来をデザインする知恵』服部圭朗 鹿島出版会（2006年）
- 『2010年代世界の不安、日本の課題．1（本編）』松原正毅、中牧弘允 総合研究開発機構（2007年）
- 『いい妻、リセット宣言』百世瑛衣乎 共同通信社（2007年）
- 『2020年の日本人―人口減少時代をどう生きる』松谷明彦 日本経済新聞出版社（2007年）
- 『10年後のあなた』『日本の論点』編集部 文春新書（2007年）
- 『おひとりさまの老後』上野千鶴子 法研（2007年）
- 『2015年の日本―新たな「開国」の時代へ 』野村総合研究所2015年プロジェクトチーム 東洋経済新報社（2007年）
- 『シナリオ2019―日本と世界の近未来を読む』宮川公男 東洋経済新報社（2007年）
- 『全予測2030年のニッポン―世界、経済技術はこう変わる』三菱総合研究所産業・市場戦略研究本部 日本経済新聞出版社（2007年）
- 『未来を洞察する』鷲田祐一 NTT出版（2007年）
- 『エコアクションが地球を救う!―データに学ぶエコ生活のすすめ』山本良一 丸善（2008年）
- 『地球環境「危機」報告』石弘之 有斐閣（2008年）
- 『ワークライフシナジー―生活と仕事の〈相互作用〉が変える企業社会』大沢真知子 岩波書店（2008年）
- 『エネルギー危機からの脱出―最新データと成功事例で探る“幸せ最大、エネルギー最小”社会への戦略』枝廣淳子 ソフトバンククリエイティブ（2008年）